

# 現代オック語諸方言の特徴\*

池田 治一郎

## I. 1 はじめに

本稿の目的は、わが国では今までに紹介されることが少なかった<sup>1)</sup>現代南フランスの言語(オック語)の特徴のいくつかを紹介することにある。ただ、限られた紙数でこの多様な言語を語ることはもとより不可能事であるし、筆者が今回とりあげた *languedocien* (*lang.*)<sup>2)</sup>、*provençal* (*prov.*)、*limousin* (*lim.*)、*gascon* (*gasc.*) の4大方言に限ったとしても、シノプシス程度のものしかお目にかけることができないことをまずお断りしておかなくてはならない。

次に、本稿の記述の主要な部分は、現代オック語全般に関する最も信頼すべき著書のうちの二点 Pierre BEC : *La langue occitane*, Paris, P. U. F., 1973 および同じ著者による *Manuel pratique d'occitan moderne*, Paris, Ed. Picard, 1973 に負っているが、上記二著からの引用については、必要と判断した場合を除き、引用箇所を明記していないことも併せてお断りしておきたい。

## I. 2 オック語と隣接諸語の境界線

ある言語が隣接する他の言語と地理的にどこで画されるかは必ずしも明確でないことが多い。オック語に関しても隣接諸言語との境が明らかであるとは限らず、特に北部ではオイル語圏との間に (*croissant*) と呼ばれる中間地帯を形成していることはよく知られている。

いま、オック語圏の詳細な限定は他書にゆずることにして<sup>3)</sup>、隣接言語に対するオック語の地理的位置をのべるなら、おおよそ次のようになる：南西ではバスク語に接し、南ではアラゴン方言 (*arag.*) およびカタロニア語 (*cat.*) に、東ではイタリア語 (*it.*) に接し、北ではフランコ・プロヴァンス語 (*fpr.*) およびフランス語 (*fr.*) に接している (図1を参照)。

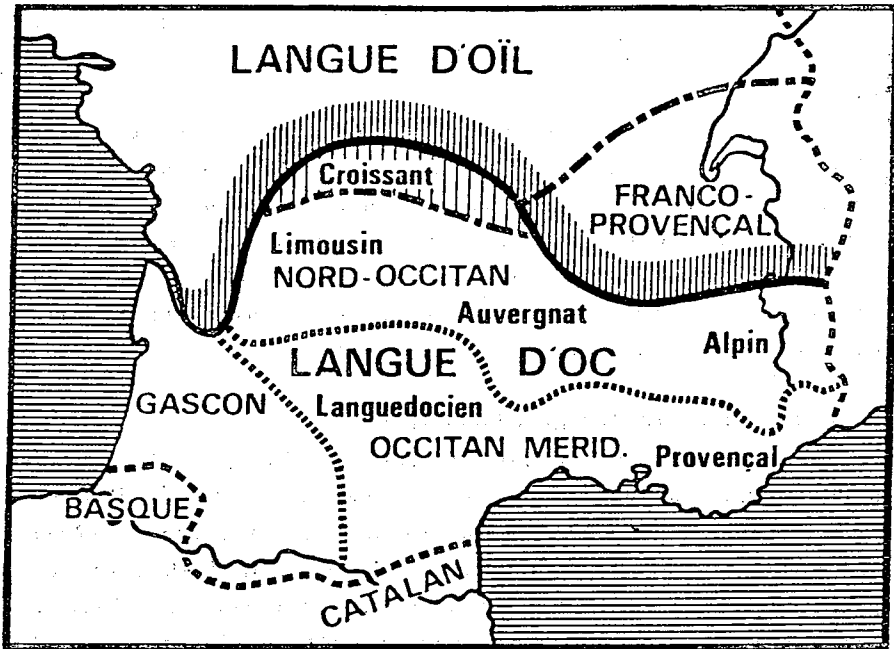
ところで、あまり判然とはしない北部での境界線は大体次のような町の間を通過している：

### a) オック語圏内の町

Bordeaux, Limoges, Clermont-Ferrand, Le Puy, Die, Valence, Briançon

### b) オック語圏外の町

Angoulême, Poitiers, Montluçon, Vichy, Sant-Etienne, Vienne, Grenoble



CARTE n° 1 — LES DIALECTES OCCITANS.

(P. BEC : Manuel pratique d'occitan moderne, p. 22)

(図1) オック語の方言

### I. 3 オック語の区分

P. BEC の分類によれば、<sup>4)</sup> 広義の *Gallo-roman* のグループは 1) *Gallo-roman (français)*, 2) *Gallo-roman (occitan)*, 3) *Gallo-roman (italien)* に分けられる。2) の *Gallo-roman (occitan)* (あるいは *Occitano-roman*) には *occitan (occ.)*, *gascon*, *catalan* が含まれ、*gasc.* には独自の位置が与えられている。*Occitan* は北オック語 (*nord-occ.*) と南オック語 (*occ. merid.*) に分かち、さらに前者には *limousin*, *auvergnat*, *provençal alpin* (又は単に *alpin*) が、後者には *provençal* と *languedocien* が含まれている (図1)。

ところで、厳密に言語学的観点からすれば *gasc.* は本稿の対象から外すことも可能かもしれないが、歴史・社会的見地に立てば *gasc.* を *occ.* の枠内に含めることが自然と思われる。事実、*gasc.* に独自の地位を与えている P. BEC 自身、彼の別の著 *Manuel pratique d'occitan moderne* では *gasc.* の章を設けている。また、異方言間での相互理解の可能性という点からみても、*gasc.* は他の *occ.* 方言を使用する人々がまったく理解に苦しむほど *occ.* と異なった言語であるとは思えない。<sup>5)</sup> 本稿の対象に *gasc.* も含めたのは主に以上の理由からである。

### I. 4 オック語の一般的特徴

本稿Ⅱ. 1以下の各方言に関する記述をたどる上で、オック語の予備知識が少しあれば便利かと思ひ、下に *languedocien* の短いテキスト<sup>6)</sup>をあげ、フランス語と比較しながらオック語の一般の特徴をいくつか拾い出してみることにする。

フランス語

Un homme n'avait que deux fils. Le plus jeune dit à son père : ( Il est temps que je sois mon maître et que j'aie de l'argent ; il faut que je puisse m'en aller et que je voie du pays. Partagez votre bien et donnez-moi ce que je dois avoir.) — (O mon fils), dit le père, ( comme tu voudras ; tu es un méchant et tu seras puni ). Et ensuite il ouvrit un tiroir, il partagea son bien et en fit deux parts.

#### LANGUEDOCIEN ( OCCITAN CENTRAL )

Un òme aviá pas que dos dròlles. Lo plus jove diguèt a son paire : ( Es ora pèr ièu de me governar sol e d'aver d'argent ; me cal poder partir e véser de pais. Despartissètz lo vòstre ben e donatz-me çò que devi aver. ) — ( O mon filh ), diguèt lo paire, ( coma voldràs tu ; siàs un marrit e seàs castigat ). Apuèi dubriguèt una tireta, despartiguèt lo sieu ben e ne faguèt doas parts.

音声転写 LANGUEDOCIEN ( Albi 口話 ), ( traduction de M. Raymond CHABERT du Conseil d'Etudes de l'Institut d'Etudes Occitanes )

ün òme abyò pas ke duy dròlles. lu pū tsube dièt a sum payre : ( ez uro per yew de me guberna sul e d abe d artsen ; me kal pude parti e beze de pais. despartisès lu bostre be e dunay-me so ke dibi abe. ) — ( o mu fil ), dièl lu payre, ( kumobuldras tū ; syòz ün marrit e seras kastiàt ). apèy dūrbièt üno tireto, despartièl lu sew be e no faèd dos pars.<sup>7)</sup>

( 下線はアクセントの位置を示す )

まず音声の点から見ることにしよう。P. BEC の音声表記 ( 註 7 ) を参照) では音素的な対立を成さない [o] / [ɔ] の区別を記していないが、オック語では [o] はほとんどあられず、

① [α], [o], [ø] のような閉母音が、まったく無いとは言えないにしても、非常に稀である。

② 鼻母音が無い。

③ アクセントは強弱アクセントであり、関与的である。

Ex parti ('parti) (= je part) / partir [par'ti] (infinitif)

④ アクセントは語末から二音節目に置かれることが多い。

以上①～④はフランス語に対立する点であるが、フランス語と共通であり、*cat.* や *esp.*

に対立する点としては、

⑤ [y] (P. BEC の表記では [ü]) を持っている、がある。

さらに、形態の点に目を移せば次のことが言える。

⑥ 主語を強調する場合を除き、動詞活用形に人称代名詞をつけない。

Ex. dubriguèt (= il ouvrit), despartiguèt (= il partagea),  
faguèt (= il fit), etc.

他に、上にあげたテキスト中にはその用例がないが、

⑦ 単純過去形や接続法未完了形を口語の中でも用いる、  
点などもフランス語と異なる点である。

語彙に関しては、上記①, ②, ③, ④, ⑥, ⑦のようにフランス語と決定的に異なるわけではないが、ある程度の隔たりが見られる。上にあげたテキスト内でも、古仏語にはそれに対応する形があったが現代フランス語では廃れてしまった《*caler*》(lat. CALERE) anc. fr. *chaloir* : fr. mod. では別の語 FALLERE に由来する falloir を用いる)とか、それに対応する形が現代フランス語に見られてもかなり用法が違っている《*dròlle*》(fr. mod. *drôle* は形容詞である)のような語が見られる点に注意して良いであろう。

ところで、現代南仏語諸方言の非常に詳しい文法を著した Jules RONJAT は、上述のような特徴も含め、オック語を他のロマン諸語から区別するための19の言語的特徴をあげている。<sup>8)</sup> オック語はそのうち4つの特徴で *cat.* から、7つで *esp.* から、8つで *it.* から、12で *fpr.* から、そして16でフランス語から区別できる。この数字はいかにオック語がフランス語以外のロマン諸語に近い性格を持っているかを十分に物語っているように思える。

最後に、ごく簡単に綴字<sup>9)</sup>の読み方を述べたうえ本題に入ることにした。

特に注意すべき点：

a) 母音字に関して、

① 文字 o は

i) ò = [o]

ii) ó 又は無アクセントなら = [u]

② 語末の a は

i) -à = [a]

ii) -á 又は無アクセントなら [ɔ]

③ 文字 u は多くの場合 [y]

④ ai, au, etc. は、フラン語のように [e], [o] のように単母音にはならず、二重母音として発音する。

⑤ an, on, etc. のような母音+鼻母のグループは、[ã], [ɔ̃] のような鼻母音とはならず、[an], [ɔn] のように発音する。

b) 子音字に関して、

① ch, lh, nh はそれぞれ [tʃ], [ʎ], [ɲ] であるが、lh, nh が語末にきた場合は [l], [n] になる

② 文字 r は

i) 語末では発音されない

- ii) 他の場合、 $r = [L]$ ,  $rr = [r]$
- ③ 語末の  $-n$  は発音されない (但し, *prov.* と *gasc.* では発音する)
- ④ 文字  $V$  は
- i) 母音間なら  $[β]$
- ii) i) 以外なら  $[b]$  (但し, *prov.* および *nord-occ.* では常に  $[v]$ )
- ⑤ 語末の  $-s$  は多くの場合発音される (但し, *prov.* および *nord-occ.* を除く)。

## II. 1 南オック語

南オック語 (*occ. mérid.*) には、すでに見たように *lang.* と *prov.* が含まれるが、まずこれら二方言に共通の特徴をあげてみよう。

- ① *lat.* CA. GA のグループが保存されている (cf. 北オック語 ①)。
- Ex. CANTARE > *cantar*, VACCA > *vaca*, GALLU > *gal*,  
GAUDIUM > *gaug*, PLAGA > *plaga*
- ② *lat.* SP. ST. SK のグループが保存されている (但し, 北部では  $S > h$ )。
- Ex. SPATULA > *espatla*, TESTA > *tèsta*, SCOLA > *escòla*
- ③ アクセントの前の  $a$  が軟口蓋化されない (但し, 北部を除く: 例えば, 北部の Rouergue では *castèl*  $[kas'tɛl]$ , *aguel*  $[ak'el]$  が  $[k s'tɛl]$ ,  $[k'el]$  に近くなる)。
- ④ 子音の口蓋化が行われず,  $s$  でさえ, 北部の Périgord を除き,  $s$  一音のままである (なお,  $s$  の調音は *cat.* や *esp.* のように歯茎音であることが多い)。
- ⑤ 二重母音母, 三重母音が堅固である。
- Ex. PATRE > *paire*, PETRA > *pèira*, AQUA > *aiga*  
BOVE > *budu*, SALE > *sau*, \*POSTIU > *puèi*
- ⑥ *lat.*  $-L-$ ,  $-LL-$  に由来する母音間の  $-l-$  が保存されている。
- Ex. PALA > *pa $\grave{a}$ la*, GALLINA > *ga $\grave{a}$ lina*, BELLA > *bè $\grave{a}$ la*
- 以上が南オック語に共通する主な特徴である。

## III. 2 Languedocien

この方言はオック語諸方言のうちでも古期オック語の特徴をもっとも良く保存している方言であり、地理的にも一番重要な位置を占めている方言であると言われている。いわゆる「オック標準語」なるものも大体この方言を基本にしたものである。また、出版物の量の点でも、現在ではこの方言によるものももっとも多い。なお、以下に他のオック語諸方言の特徴を述べる際、*languedocien* との対比において見ることが多いことを附言しておく。

この方言の特徴に数えられるものとして次のようなものがあげられる。

- ① 複数形の語末の  $-s$  が保存される (cf. *prov.* ⑤, *lim.* ⑨)。
- ② *lat.*  $-L-$ ,  $-LL-$  に由来する語末の  $-l$  が、東端の地方 (例えば *Montpellier*) を除き、母音化されない。
- Ex. SALE > *sa $\grave{a}$ l*, VITELLU > *vedè $\grave{a}$ l*  
NATALE > *nada $\grave{a}$ l*, BELLU > *bè $\grave{a}$ l*
- ③ 古期オック語の時代には《 $-n$  instable》「不安定な  $-n$ 」と呼ばれていた語末の

‐*n* (lat. では母音間の‐*N*‐であったが、語末の母音が落ちたため語末に came した‐*n*) は脱落する。

Ex. PANE › *pan*, BENE › *ben*, VINU › *vin*

正書法により上のように記すが、発音はそれぞれ〔pa〕, 〔be〕, 〔bi〕である。

- ④ 唇歯音の〔v〕を欠く。したがって、文字の上では語源的な *B/V* の対立を留めるもの、音の点では同一になり〔b〕 (母音間では〔β〕) と発音される。

Ex. fava [ˈfaβo], lavar [laˈβa], vin [bi]

- ⑤ 語末子音が堅固である。

Ex. cantat [kantat], lop [lup], vengut [bengyt], bèc [bek]

- ⑥ 定冠詞複数形は *los, las* となり二価的ではない (cf. *prov.* ⑥)

## II. 3 Provençal

この方言は F. MISTRAL や Th. AUBANEL のような大詩人達の言葉として 19 世紀以来世界に知られている。また、特に上記の詩人達の文学的威光から、南仏語の代名詞のように見なされたことがあったし、時には現在でも、《*provençal*》という語が南仏諸方言の総称として用いられることもある。

ところで、*provençal* はオック語諸方言のうちで一番 *lang.* に近い方言であるが、*lang.* とは異なる次のような言語的特徴をもっている。

- ① 語源的な *B/V* の対立を保存している (cf. *lang.* ④)

Ex. *banc* [baŋ] (= *banc*)      *bòla* [ˈboˌlo] (= *boule*)  
*vam* [vaŋ] (= *élan*)      *vòla* [ˈvɔˌlo] (= *il vole*)

- ② 語末の *-l* が母音化する (cf. *lang.* ②)

Ex. *prov.*    *nadau*    *bèu*  
*lang.*    *nadal*    *bèl*

- ③ 「不安定な‐*n*」が保存される (cf. *lang.* ③)

Ex. *prov.*    *pan* [paŋ],    *vin* [viŋ]  
*lang.*    *pa(n)* [pa],    *vi(n)* [bi]

- ④ 語末子音が脱落する (cf. *lang.* ⑤, 北オック語 ④)。

- ⑤ 上の ④ に関係して、複数語尾の *-s* が発音されなくなるため、事実上名詞の複数を示す機能を担うのは定冠詞である (cf. *lang.* ⑥, *lim.* ⑨)

Ex.                  *m.*                  *f.*  
*sing.*    *lo can*      *la vaca*  
*pl.*      *li can(s)*    *li vaca(s)*

- ⑥ 定冠詞をはじめとして、複数形が *-ei(s)*, 又は *-i(s)* で終るような限定詞をもっている。特に MISTRAL の言語、*provençal rhodanien* ではそうである (cf. *lang.* ⑥, *lim.* ⑨)。

Ex. *fr.*                                  *prov.*                                  *lang.*  
*les jolies femmes,*    *li polidi femnas,*    *las polidas femnas*  
*m. pl.*    *mes amis* ,    { *mis amics*                  ,    *mos amics*  
*f. pl.*    *mes amies* ,    { *mis amigas*                ,    *mas amigas*

すでに上の例でもわかったように、上記の限定詞複数形は *bivalent* (二価的) であ

り、男・女同形になることに注目されたい。

### Ⅲ. 1 北オック語

一般的に言えば、北オック語に属する諸方言は言語変化がかなり進み、よりフランス語に近づいているといえることができる。以下北オック語に共通する特徴をいくつか拾い上げてみよう。

① *lat.* CA, GA が口蓋化されている (cf. 南オック語①)。

Ex.		北オック語	<i>lang.</i>
	CANTAT >	<i>chanta</i>	<i>canta</i>
	CASTELLU >	<i>chastèl, -èu</i>	<i>castèl, -èu</i>
	BRANCA >	<i>brancha</i>	<i>branca</i>
	MUSCA >	<i>moscha</i>	<i>mosca</i>
	*GAUDIRE >	<i>jauvir</i>	<i>gausir</i>
	GALLINA >	<i>jalina</i>	<i>galina</i>
	PLAGA >	<i>plaja</i>	<i>plaga</i>

② *lat.* の母音間の -D- は無声化した。

Ex.	<i>lat.</i>	北オック語	<i>lang.</i>
	*CREDEMUS >	<i>creiem</i>	<i>cresem</i>
	VIDEMUS >	<i>veiem</i>	<i>vesem</i>
	LAUDARE >	<i>lauvar</i> <sup>10)</sup>	<i>lausar</i>
	AUDIRE >	<i>auvir</i>	<i>ausir</i>

③ Auvergne 南部を除き、唇歯音の [v] がみられる (cf. *lang.* ④, *prov.* ①)。

④ *provençal alpin* (あるいは単に *alpin*) を除き、語末子音が脱落する (cf. *lang.* ⑤, *prov.* ④)。

⑤ 語末の -l が母音化する (cf. *lang.* ②, *prov.* ②)。

⑥ 母音間の -l- はしばしば r, r, w に変る (cf. 南オック語 ⑥)。

Ex.	<i>lang.</i>	北オック語
	<i>pała</i>	<i>para, paʀa, pawa</i>

⑦ sk, sp, st のグループでは s が脱落するか母音化する (cf. 南オック語 ⑥)。

Ex.	<i>chastèu</i> [ts 't w],	<i>estiu</i> [ej'tiu],	<i>espiar</i> [e'pja]
	<i>escut</i> [ej'kyt]		

⑧ 動詞の一人称単数形の語尾が -e で終り、-i で終ることは稀である。

Ex.	北オック語	<i>lang.</i>
	<i>chante</i>	<i>canti</i>

以上、北オック語に共通な特徴をいくつかあげてみた。ところで、このグループに属する方言としては *limousin*, *auvergnat (auv.)*, *provençal alpin* (又は *alpin*) がある。以下では、これらの方言のうち *limousin* で書かれた短いテキストをとりあげ、このテキストにあらわれている北オック語共通の特徴と *limousin* 固有の特徴をいくつか拾い出してみることにする。

### Ⅲ. 2 Limousin

Trobadorsの間では文学語として、ある種の共通語が用いられたが、これには多くの limousinismes が含まれているという。このことから、彼等のコイナーは *limousin* であったとする説も生まれるが、このように速断することはできないようである。<sup>12)</sup> ただ、おそらくは Guilhem de Peitieu を初めとする Limousin・Marche およびその周辺の地方出身であった初期 Trobadors の文学的威光のためと思われるが、13世紀初めになると《le mosi (= *limousin*)》という語は南仏語全体を指す場合にも用いられたらしい。<sup>13)</sup>

さて、現在 *limousin* が用いられるのはドルドーニュ川の北に位置する Corrèze, Haute-Vienne および Creuse の諸地方である。また *limousin* 内部では、より保守的な *bas-limousin* (中心は Brive 盆地) と進化の進んでいる *haut-limousin* (おおよそ、Haute-Vienne 県と Creuse 川南部の地域) とが認められる。次にあげるテキストの作者 Marcelle DELPASTRE 女史〔1925〜〕は Corrèze の生まれであり、数年間リモージュで教育を受けた期間を除けば現在も生地に留まり文学活動が続けているとのことであるから、<sup>14)</sup> 女史の言語は *bas-limousin* であると言える。なお、このテキストには、J. MIGOT, P. BEC 共同による音声転写、作者自らの手に成るフランス語訳、P. BEC の手に成るオック標準語訳が添えてあるので、これも合わせて引用させていただいた。(引用は P. BEC: *Man. prat. d'occ. mod.*, pp. 149-151)

#### Limousin.

Marcelle DELPASTRE [1925-]

#### *Lo Dalús*

*Lo dalús, quo es 'na bèstia feramina que degun l'a jamai vista, mas que fasiá plan parlar d'ela per lo país, en quauqu'un temps. Dempuei, n'auviriatz pus res dire dins nòstras contradas, e lo quite nom ne'n seriá oblidat, si n'era un brave torn, qu'arribet ad un bon dròlle un pauc d'escart, i a benleu be cent ans.*

*QUEU ser, se trobava au palon de l'estanh de las Granulhus, e ne sabe pas tròp çò que lai fasiá, mas se podriá ben qu'esperava quauqua dròlla que veniá pas redde. Las dròllas, òm zo sap, son pas sovent despachadas.*

*CHAU dire qu'aquel estanh era drubit dempuei desjà dau temps, l'aiga lo TRAUCHAVA, un petit riu, e sautava tota per la bonda jos lu CHAUCADA. Aitanben, en prene paciència, lo jòune òme avisava passar l'aiga debàs, sens pensar ad arrés. Lai era dempuei un bon moment, quand 'RIBET per lo mesme CHAMIN 'n autre drollaud, pas daus pus fins segur, que li cridet:*

*— Au Peire ! Qué fas ?².*



[lu dölü kwéy nò bəhtyo (/beytyo) féromino ké dégü l ò (d)zòmèy vihto, ma ké fòzyò plò pòrla d ilo pèr lu pòyi, én káwk æn<sup>4</sup> tén. démpèy, n áwviya pü ré díré<sup>5</sup> di nõhtra kuntrada, é lu kité nu n én šiyo

áwblidò ši n éro æm bravé tur k òribé òd æm bun dròrlé, æm paw d éhkar (/ d éykar), y ò beléw bé sént añ.

kéw sér<sup>1</sup>, sé trubav òw pòlù dé l éytan dé la grònüya, é né šabé pa tro šò ké léy fòzyò, ma sé pudryò biñ k éypéravo káwko dròrlo ké vényò pa rédé. la dròrla, un žu šò, šu pa šuvén déypòt(t)sado.

(t)saw díré k òkél éytan éro drúbí démpèy déyza dòw tén, l éygo lu tráw(t)savo, æm péti ryéw, é šawtavo tuto pèr lò bundo (d)zu lò (t) sáwšado. éytóbé ém préné pòšyénšo, lu (d)zòwn òmé òvižavo pòša l éygo déba, sém pénša òd òrč. léy éro démpèy æm bum mumén, kan ribé pèr lu méymé (t)sòmí n áwtré drurlaw pa dòw pü fi ségür, ké yi kričé :

— áw, péyрэ, ké ša ? ]

作者によるフランス語訳

Le dalus, c'est une bête fantastique que personne n'a jamais vue, mais dont on parlait beaucoup autrefois dans le pays. Depuis, on n'en entend plus rien dire dans nos contrées, et même le nom serait oublié, sans un bon tour advenu à un brave garçon qui aimait la plaisanterie, il y a peut-être bien cent ans.

Ce soir-là, il se trouvait sur la chaussée de l'étang des Grenouilles, et je ne sais trop ce qu'il faisait là, mais il est probable qu'il attendait une jeune fille, laquelle tardait à venir. Les filles, on le sait, ne sont guère pressées d'arriver.

Il faut dire que cet étang était ouvert depuis longtemps déjà ; l'eau le traversait, un petit ruisseau, et sortait toute par la bonde sous la chaussée. Aussi, en prenant patience, le jeune homme regardait-il passer l'eau par cette bonde, sans penser à rien. Il était là depuis un bon moment, quand, par le même chemin, survint un autre garçon, pas des plus intelligents, certes, qui l'interpella :

— Hé ! Pierre ! Que fais-tu ?

Lo dalús, aquò es una bèstia feramina que degun l'a pas jamai vista, mas que fasiá plan parlar d'ela per lo país, autre temps. Dempuei n'ausiriatz pus res dire dins nòstras contradas, e lo quite nom ne seriá oblidat, se n'èra un brave torn qu'arribèt a un bon dròlle un pauc d'escart, i a benlèu cent ans.

Aquel ser, se trobava al palon de l'estanh de las Granolhas, e n'òm sabe pas tròp çò que lai fasiá, mas se podriá ben qu'esperava quauque dròlla que veniá pas de lèu. Las dròllas, òm o sap, son pas sovent despachadas.

Cal dire qu'aquel estanh èra dubrit dempuei ja de temps, l'aiga lo traucava, un petit riu, e sautava tota per la bonda jos la cauçada. Aitanben, en prene paciéncia, lo joine òme avisava passar l'aiga dejós, sens pensar a res. Lai èra dempuei un bon moment, quand arribèt per lo meteis camin un autre drollaud, pas dels pus fins segur, que li cridèt :

— Au Pèire ! Qué fas ?

III. 3 テクスト内の北オック語ならびに *limousin* 的特徴

- ① 語末子音の脱落 ( cf. *lang.* ⑤, *prov.* ④, ⑤, v. 北オック語 ④ )

Ex. *dalus, pais, temps, pus, res, nom, etc.*

- ② *Aphérèse* ( 語頭音省略 ) がおこる。この現象は特に *limousin* に顕著であり、語頭の *a-* におこることが多い。

Ex. *Quò, 'na, Queu*

上の語は *lang.* では、それぞれ *Aquò, una, Aquel* になる。

- ③ *st, sk, sp* のグループの *s* が脱落したり、[h] になったり、母音化したりする ( cf. 南オック語 ②, v. 北オック語 ⑦ )

Ex. *bèstia, vista, escart, esperava, etc.*

- ④ *lat.* の母音間の *-D-* が脱落する ( v. 北オック語 ② )。但し、*lat.* *-D-* が AU の後にある場合は、*-D-* が脱落した後、*v épenthétique* ( 語中添加の *v* ) があらわれる。例えば、

*AUDIRE* > *auvir*, *LAUDARE* > *lauvar*, *ALAUDA* > *lauveta*

のようになる。

Ex. *auviriatz*

- ⑤ 語末の *-l* が母音化する ( cf. *lang.* ②, *prov.* ②, v. 北オック語 ⑤ )。

Ex. *queu, chau, dau*

- ⑥ *lat.* CA, GA の口蓋化 ( cf. 南オック語 ①, 北オック語 ① )。

Ex. *trauchava, chauçada, chamin*

- ⑦ アクセントの前の *a* が [ɔ] になる。しかし、オック語ではこの位置で音素 /o/ が [ɔ] となってあらわれることはないので、結局、*limousin* では音素 /a/ の分布圏

が広がっただけのことである。

Ex. *dalus, jamai, parlar, etc.*

⑧ 上の⑥とも関連があるが、シュー音とスー音の対立に組替えがおこる。

	<i>si</i>	<i>fasiá</i>	<i>agache</i>	<i>jamai</i>
<i>lang.</i>	[s]	[z]	[ʃ]	[dʒ]
<i>lim.</i>	[ʃ]	[ʒ]	[(t)s]	[(d)z]

Ex. *si, fasia, jamai, despachdas, chamin*

⑨ 語末子音が発音されないため、名詞の複数は主として定冠詞によって示されるが、*provençal* のように定冠詞が二価的になるようなことはない。但し、女性名詞に関しては、単数／複数の対立が [o] / [a] の対立であらわされることが多い：*la filha* [lo 'fiʒo] / *las filhas* [la 'fiʒa]。(cf. *prov.* ④, ⑤, v. 北オック語 ④)

Ex. *nòstras contradas, las dròllas*

以上が上のテキストにあらわれた北オック語に共通の特徴および *limousin* の特徴の主なものであるが、この他に、オック語に共通の中性代名詞 *o* が *zo* という *limousin* 的なヴァリエントとしてあらわれている点なども指摘できる。

#### N. 1 Gascon

*Gascon* はいくつかの独自な特徴をもっているため、すでに *Trobadors* の時代でさえ、彼等のコイナーから見れば外国語でもあるかのような扱いを受けることがあった。<sup>15)</sup> G. ROHLFS はそれらの独自な特徴のいくつかをガスコニユの先住民族の言語基層に帰すと共に、現在よりはずっと広い地域に分布していたはずのバスク語とこの *gascon* との関連を強調している。<sup>16)</sup>

#### N. 2 Gascon に独自な言語特徴

① *lat. F* が *h* になる：*gascon* には唇歯音 [f] は無く、*lat. F* は単なる気音になってしまった。

Ex.		<i>gasc.</i>	<i>lang.</i>
FILIA >		<i>hilha</i>	<i>filha</i>
FARINA >		<i>haría</i>	<i>farina</i>

② 母音間の *-n-* は脱落する。

<i>lang.</i>	<i>gasc.</i>
<i>una</i>	<i>ua</i>
<i>luna</i>	<i>lua</i>

③ *a-* *prosthétique* (語頭添加の *a-*) が *r-* の前にあらわれる。

Ex.	<i>lang.</i>	<i>gasc.</i>
	<i>ren</i>	<i>arren</i>
	<i>riu</i>	<i>arriu</i>
	<i>ròsa</i>	<i>arròsa</i>

④ *lat.* の LL の変化が独特である。

a) 語末では：*-LL* > *-th* (*th* は [tʰ] または [ʃ] )。但し、*Landes* のような平

野部では〔t〕)になる。

Ex.		<i>gasc.</i>	<i>lang.</i>
VITFLLU	>	vedèth, vedèt	vedèl
BELLM	>	bèth, bèt	bèl
CASTELLM	>	castèth, castèt	castèl

b) 母音間なら：-LL->-r-になる。

Ex.		<i>gasc.</i>	<i>lang.</i>
BELLA	>	bèra	bèla
GALLINA	>	gar!a	galina

なお、LLが*gascon*の場合のように変化した例はロマン諸語の中でも非常にめずらしい例とされている。

⑤ 同化の結果、*mb*, *nd*のグループはそれぞれ *m*, *n*になる。

Ex.	<i>lang.</i>	<i>gasc.</i>
colomba		coloma
demandar		demanar

⑥ Métathèse (音位転換)が頻繁におこる。

Ex.	<i>lang.</i>	<i>gasc.</i>
cabra		craba
cambra		cramba

このような*gascon*の音位転換は次のように法則化されている：「強アクセント音節の後の閉鎖音に位置するrは、第一音節の最初の子音に引き寄せられる」<sup>17)</sup>。

⑦ 動詞活用形に関して、*gascon*には独自の形が存在する。

a) 不定法が-er, -irに終るオック語動詞は直説法・未完了・三人称・単数形で一般に-ia〔jo/je〕の形をとるが、*gascon*では、

i) inf. が-er, -erなら, -è, -eva〔ewo〕

ii) inf. が-irなら, -i, -iva〔iwo〕

の形をとる。

Ex.	<i>inf.</i>	<i>gasc.</i>	<i>lang.</i>
i) arrider	( <i>lang.</i> rire)	arridè, -èva	risid
ii) dormir		dormi, -iva	dormissid

b) 単純過去形で*gascon*は-r-の入らない活用語尾体系をもっている。

Ex.	<i>gasc.</i>	<i>occ. commun</i>
cantèi		cantèri
cantès		cantères
cantè(c)		cantèt
cantèm		cantèrem
cantètz		cantèretz
cantèn		cantèron

⑧ *Que*, *ja*, *be*(b')のような *particules énonciatives* (発話小辞)をもっている。これらの小辞は発話の前に置かれ、発話を補強する役割を果たす。*ja*, *be*は主観的なニュアンス(情意的あるいは論理的な強調)が込められるのに対し、*Que*

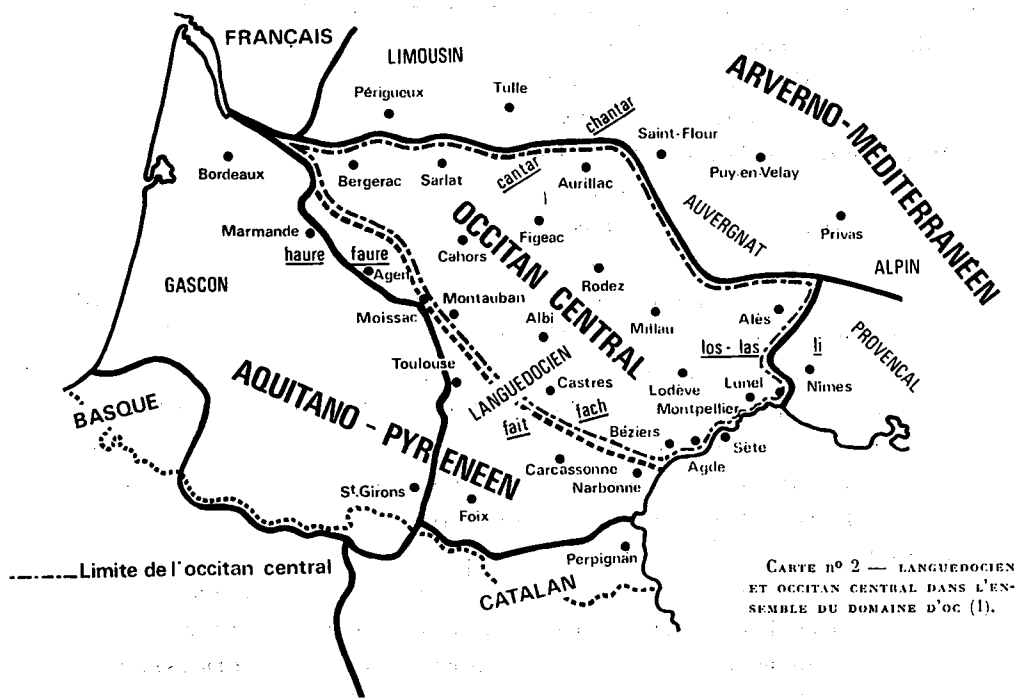
はほとんど文法化されていて単に発話の印にすぎなくなっている。

Ex. *Be i anirem.* (我々は確かにそこに行くつもりだ。)  
*J'avètz un berdi ostau.* (あなたは本当に家をお持ちだ。)  
*Que m'apèri Joan.* (=lang. M'apèli Joan.)

以上で代表的なオック語諸方言の特徴の主なものを瞥見し終えた。

#### V. Supra-dialectal (超方言的) 区分

ところで P. BEC は、別の基準を採用することにより、すでに見たような基本的な方言の境界に跨がるような別の区分も可能であるとし、図 2 に見られるような区分もあげている。<sup>18)</sup>



( P. BEC : *Manuel pratique d'occitain moderne*. p. 23 )

[ 図 2 ] オック語圏全体におけるラングドック語と中オック語

紙数もほとんど尽きたいま、図 2 の区分の基準となっている言語的特徴について詳しく述べることはできないので、次の二点のみを記すことに留めよう。

第一の点は、いくつかあげられている特徴のうち、*Aquitano-pyrénéen* と中オック語 (*occ. central*) との境界では -CT- の口蓋化の有無が、また *Arverno-méditerranéen* と中オック語との境界では ① 唇歯音 [v] の有無、② 語末子音が良く保存されているか等が、それぞれ区分の重要な目安となりうることである。

第二の点は、イベロ・ロマン的要素の濃い *Aquitano-pyrénéen* と言語進化の激しか

った *Alverno-méditerranéen* とに挟まれた中オック語は、隣接する両グループの言語的特徴をいくぶんかずもっているもので、これら両グループへの掛け橋となりうることである。いわゆる標準オック語として中オック語が奨められることがあるのも、上に述べたような中オック語の性格がその理由の一つである。

## V. 結び

オック語復権の運動は MISTRAL を中心とする Félibrige の運動を以て一つの頂点に達した感もある。だが、彼亡き後も地道な活動は絶えることがなかったし、そのような努力が実を結び今やこの運動は新たな盛り上りを見せようとしている。過去約半世紀にわたるこの種の地道な活動の中でも、P. ESTIEU, A. PERBOSC, L. ALIBERT 等による正書法の改良, Institut d'Etudes Occitane の設立 (1945) 等は、現在の運動の確かな礎を築いた点で特記すべき活動であったといえよう。

また一方では、地方語の教育を保証する Deixon 法が 1951 年に成立し (但し、実際に適用されたのは 1970 年)、現在では、中等教育の段階で、10人以上の生徒の要求があれば、週 3 時間の枠内でオック語のクラスを設けることができることになっている。また、バカロレアの受験科目の一つ (第二外国語) にも認められており、毎年かなりの数の生徒がオック語を第二外国語に選択して受験している。

さらに、オック語に対する関心の高まりは単に教育の面に限られるわけではなく、オック語を用いたさまざまな文化活動が、特に最近 10 年ほどの間に、活発になってきている。<sup>19)</sup>

また、このような南フランスの動きに並行するかのよう、フランス国内ではもとより、欧米においても Occitanie の言語・文化に対する関心が徐々に高まってきているように思われる。フランスの国土の約 3 分の 1 を占め、約 800 万 (うち 200 万人がオック語を常用) の occitanophones を擁する Occitanie への関心がわが国においても一層高まることが望まれている。

1979 年 10 月 10 日

## Bibliographie sommaire

- Lois ALIBERT : *Gramatica occitana*, Montpelhièr, Centre d'estudis  
2e éd., 1976.  
" : *Dictionnaire occitan-français*, Toulouse, I. E. O.,  
édition 1977.  
Joseph ANGLADE : *Grammaire de l'ancien provençal*, Paris, Klincksieck, 1921 (Réimp. 1969)  
Roger BARTHE : *Lexique occitan-français*, Paris, Les amis de la  
langue d'Oc, 1972  
" : *Lexique français-occitan*, Paris, Les amis de la  
langue d'Oc, 1973  
Pierre BEC : *Petite nomenclature morphologique du gascon*, Toulouse,  
I. E. O., 1959  
" : *La langue occitane*, Paris, P.U.F., 3e éd. 1973

- " : *Manuel pratique de philologie romane*, Paris, Ed. Picard, 2 vols., 1970-1971
- " : *Manuel pratique d'occitan moderne*, Paris, Ed. Picard, 1973
- Camille CHABANEAU : *Grammaire limousine*, Paris, Maisonneuve, 1876
- André DUPUY : *Petite encyclopédie occitane*, Toulouse, 2e éd. 1972
- Gérard GONFROY : *Dictionnaire normatif limousin-français*, Tulle, Lemouzi, 1975
- Histoire d'Occitanie* (par une équipe d'historiens sous la direction d'André ARMENGAUD et Robert LAFONT), Paris, Hachette, 1979
- 工藤 進 「南仏の言葉 — 現代ラングドック語とガスコーニュ語」, 『東京教育大学言語論叢』11号, 1971 pp. 189-194
- " : *Le gascon moderne*, 『明治学院大学論叢』, No. 207 (pp. 1-10) No. 217 (pp. 1-11), 1973・1974
- Rabert LAFONT : *L'ortografia occitana*, Montpelhièr, Centre d'Etudis Occitans, 1971
- Le livre blanc de l'action culturelle occitane*, Toulouse, I. E. O., 1973
- V. LESPY et P. RAYMOND : *Dictionnaire béarnais ancien et moderne*, Montpellier, 2 tomes 1887 (Réimp., Genève, Slatkine, 1970)
- J. H. MARSHALL : *The Razos de trobar of Raimon Vidal*, London, Oxford Univ. Press, 1972
- ミストラル『プロヴァンスの少女』, 杉富士雄訳, 岩波文庫, 1977
- Martin DE RIQUER : *Los trovadores*, 3 tomes, Barcelona, Editorial Planeta, 1975
- Gerfald ROHLFS : *Le gascon*, Tübingen (Max Niemeyer) et Pau (Marripouey jeune), 3e éd. 1977
- Jules RONJAT : *Grammaire istorique des parlars provençaux modernes*, Montpellier, Société des Langues Romanes, 4 tomes, 1930-32-37-41
- 杉 富士雄 『南仏抒情詩人テオドル・オーバネル』, 大修館, 1960
- Jacme TAUPIAC : *Pichon diccionari francés-occitan*, Toulouse, I. E. O., 1977
- Michel TINTOU : *Grammaire limousine*, Tulle, Lemouzi, 1973

註

\* 本稿の一部は、1979年5月19日京都外国語大学で開かれた日本ロマンス語学会第15回大会で、「現代オック語について」と題して報告された。

- 1) 現代南仏語を紹介している著作・論文として、わが国でもすでに次のようなものが公にされているので参照されたい。
  - ① 杉 富士雄 『南仏抒情詩人オーバネル』、大修館、1960（第二部第二章発音の手引、第三章語彙集、第四章現代プロヴァンス語小文法、は現代南仏語の概要を初めてわが国に紹介したものである。なお、同書は、南仏語原典からの日本語訳および詩人オーバネルの研究書としてもわが国で最初のものである）。
  - ② 工藤 進 「現代ラングドック語とガスコーニュ語」、『東京教育大学言語論叢』、11号、1971、pp. 189-194
  - ③ " : *Le gascon moderne*, 『明治学院大学論叢』、No. 207 ( pp. 1-10). 217 ( pp. 1-11 )  
以上の他に、現代オック語の特定の言語現象を扱った論文が何編か公にされている。
- 3) この点に関して、詳しくは、P. BEC : *La langue occ.*, pp. 10-11 および J. RONJAT : *Grammaire istorique des parlers provençaux modernes*, t. I pp. 10-22 を参照。
- 4) P. BEC : *Manuel pratique de philologie romane*, t. II p. 472
- 5) 異方言間での相互理解の可能性に関しては、次の二つの証言（J. RONJAT のものは1930年頃のもの、A. ARMENGAUD のそれは1979年のものである）。
  - ① (—Entre l'Océan, les limites N. et E., la Méditerranée et la limite de S. de notre langue, ---, un omme de Marseille, de Toulouse, de Pau, etc., peut partout, en parlant son langage naturel, être compris par les indigènes, et peut partout comprendre le langage de ceux-ci ---) (J. RONJAT : *Gram. ist.*, t. I p. 6)
  - ② (Or, l'intercompréhension entre occitanophones, du moins entre ceux d'entre eux qui connaissent vraiment leur parler occitan local, est certaine, même si elle nécessite au début quelque effort d'adaptation.) (*Histoire d'Occitanie*, Introduction par André ARMENGAUD, p. XII)
- 6) P. BEC : *La langue occ.*, p. 59, pp. 112-113 に収められている *Parabole de l'Enfant Prodigue* の音声転写。オック語訳の一部を引用。
- 7) 本稿では原則として国際音声学協会 ( I. P. A. ) の音声記号を用いたが、上記 P. BEC の二著から引用した2つのテキストに関しては、原書にある音声転写をそのままあげてある。

以下に、いくつか注意を要する点をあげておこう。

- a) Texte 1 では : o = [ɔ] (原則としてオック語には閉音の [o] はない)  
ü = [y], y = [j]
- b) Texte 2 では : Texte 1 に対する注意の他に, ñ = [ɲ], t, d, k, m, b, r, f, y はそれぞれ, [t], [d], [k], [m], [b], [r], [f], [v] に



いわゆる《palatalisation conditionnée》が伴った音である。

- 8) J. RONJAT: *Gram. istorique*, t. 1, pp. 6-8 参照。また, P. BEC: *La langue occ.*, pp. 25-33 には, この 19 の特徴の多くが実例と共に説明されている。
- 9) 本稿では正書法の問題に立ち入る余裕はなかった。この問題に関しては, P. BEC: *La langue occ.*, pp. 100-112 の他に, 次の二書を参照。
- ① ミストラル『プロヴァンスの少女』, 杉富士雄訳(巻末のミストラル年表および訳者の解説により, Félibrige の書法が成立するまでの経緯を知ることができる)。
- ② R. LAFONT: *L'ortografia occitana*, Montpelhièr, Centre d'Estudis Occitans, 1971 (現在もっとも広く用いられている I. E. O (南仏学会) の正書法の原理を述べた書)。
- 10) この v については, 後出 III. 3 の④で説明。
- 11) P. BEC: *Man. prat. d'occ. mod.*, pp. 149-51 所収。
- 12) J. ANGLADE: *Grammaire de l'ancien provençal*, Paris, Klincksieck, 1969 pp. 14-15 参照。
- ただし, このような limousinisme を理由に, Trobadors のコイナーが *limousin* であったと速断することはできないようである。Trobadors のコイナーの起源に関しては, この問題が南仏抒情詩の起源をめぐる問題とも密接に結びついていることもあり, 数多くの仮説(たとえば, *limousin* 説, *narbonnais* 説, *poitevin* 説, 中オック語説)が唱えられている。しかし, 現在のところ, いずれの説も定説に到ってはいないように思われる。なお, *Histoire d'Occitanie*, 第二章 *Naissance de l'Occitanie* の *Constitution de l'Occitanie littéraire et véhiculaire* (pp. 256-279) には, P. BEC による上記諸説の紹介, 検討があるので参照されたい。
- 13) この点に関しては, 13世紀初めに活躍したカタロニアの詩人 Raimon Vidal de Besalu によって書かれた詩法と文法の手引 *Razos de trobar* の 75 行目 (J. H. MARSHALL 版, p. 6) の《la lenga lemosina》および 465 行目 (J. H. MARSHALL 版, p. 24) の《lemosinas》の解釈が問題になった。C. CHABANEAU は, リムザン方言のみを指すものと解釈したのだが (*Gram. limousine*, Paris, Maisonneuve, 1876 p. 3), 現在では, これらの語をもっと広い意味にとり, 単にリムザン地方(又は方言)に関係するのではなく, 南仏(又は南仏語)全体を指して用いられていると解釈する意見が一般的である (J. ANGLADE: *Gram. de l'anc. prov.*, p. 7, J. H. MARSHALL: *The Razos de trobar of Raimon Vidal*, London, Oxford Univ. Press, 1972, p. 108, P. BEC: *La langue occ.*, p. 65)。
- 14) *L. Occitan periodic de la vida occitana*, Toulouse, No. 21, 1979 p. 9
- 15) 13世紀の初め, Rambaut de Vaqueiras は彼の《descort》(南仏の抒情詩の一ジャンルであり, 各節ごとに異なった韻・曲・方言を用いなければならない)の中で, *gascon* による節を *occ., it., fr., gallaico-portugais* 等の言語で書か

れた節に並置している (M. DE RIQUER: *Los trovadores*, Barcelona, Editorial Planeta, 1975 t. II pp. 840-842)。また, DE RIQUER は複数の言語で書かれた Trobadors の詩を二篇あげている (① 13 世紀半ばの Bonifaci Calvo の sirventes, "Un nou sirventes ses tardar": fr., occ., esp. の三ヶ国語。DE RIQUER: *Los trovadores*, t. III pp. 1422-1423。② 13 世紀後半の Cerveri de Giron の "Nuncha guerria eu achar", DE RIQUER: *Los trovadors*, t. III pp. 1571-1573) が, 後者は, DE RIQUER に従えば, *galaisco-portugais, castillan, occ., fr., gasc., it.* の 6 ヶ国語で書かれているという。

さらに, 14 世紀に Toulouse で書かれた *Leys d'Amors* の中では, 《apela lengatge estranh coma frances, engles, espanhol, gasco, lombard》のように gascon を外国語扱いにしているという (G. ROHLFS: *Le gascon*, p. 1)。

*Ley d'Amor* のように gascon を外国語扱いするのは誇張であるとしても, すでに当時の人々にも gascon の独自の性格が強く感じられたのであろう。

16) G. ROHLFS: *Le gascon*, 特に, chap. II Les origines linguistiques préromanes (pp. 38-59) および Chap. III Phonétique historique de gascon の pp. 145-150, p. 157 を参照。

17) G. ROHLFS: *Le gascon*, p. 167

18) このような基準について, P. BEC は次のように述べている:

(--- critères caractéristiques qui diviseront le domaine occitan dans son ensemble, transcendant ainsi les grands dialectes et consacrant une fragmentation de la langue d'oc définie, non par rapport à ces dialectes, mais en fonction de l'entité occitane tout entière.) (P. BEC: *La langue occ.*, p. 54)

19) 文化運動一般については, 統計的な数字も交えて比較的新しい情報を提供してくれる次の二書を参照されたい。

① André DUPUY: *Petite encyclopédie occitane*, 2<sup>e</sup> éd 1972

② *Le livre blanc de l'action culturelle occitance*, Toulouse, I. E. O., 1973